HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	継続性と循環性 ： イタリア保育視察から考える日本の保育における基底的カリキュラム
Author(s)	川田, 学
Citation	子ども発達臨床研究, 21, 35-45
Issue Date	2024-11-30
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.21.35
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93815
Type	departmental bulletin paper
File Information	007-1882-1707-21.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

DOI：10.14943/rcccd.21.35

継続性と循環性

ーイタリア保育視察から考える日本の保育における基底的カリキュラムー

川　田　　学*

Continuity and Circularity : Considering the underlying curriculum of Japanese early childhood care and education through a visit to Italy

Manabu KAWATA

【目次】

１．はじめに
２．パンデミック１年目の終わりに
３．イタリアの保育関係者が使う語彙
　estetico と relazione
　autonomia と identità
　continuità
４．継続性と循環性

１　はじめに

新型コロナウィルス（COVID-19）のパンデミックは、世界中の保育現場に多大な影響を及ぼした。長期にわたるロックダウンを行った国や地域では、人々の社会的交流や子どもの経験に深刻なダメージを負わせたと想像される。2023 年 2 月、筆者ら一行はイタリア北部の複数の保育現場を訪問したが、イタリアもまた度々のロックダウンを経験し、保育現場はそこからの回復途上にあった。トスカーナ州ピストイア市（人口約 9 万）の学校外の教育施設である Area Bambini Blu（子どもの領域・青）[1] を訪問した際、その専属教師が次のようなエピソードを話してくれた[2]。

「イタリアでは、長期のロックダウンをした結果、街も人々の心も閉じてしまいました。大人も子どもも孤立してしまったのです。それを温めなおすために、子どもたちと人の心を温めるような優しい言葉をプレゼントするプロジェクトを行いました。ここから 10 分ほどの場所に男性刑務所があるのですが、その中でも比較的刑の重い人たちに、子どもたちが紙に書いた優しい言葉を教師が届けることにしました。すると、囚人たちも自然に優しい言葉を子どもたちに返してくれたのです」

* 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター・准教授

日本は、感染拡大の初期（2020 年 4 月～5 月）に 1 か月ほど幼稚園を含む学校の臨時休校を行ったものの、欧州やニュージーランドなどで行われたような長期間におよぶ社会封鎖（ロックダウン）は行われなかった。日本でも、パンデミックによる様々な制限が及ぼした実践への影響は小さくないと考えられるが、何がどのように影響を受けたのかが、イタリアとは異なるように思われた。本稿では、COVID-19 の感染拡大がようやく落ち着いてきた時期のイタリアの保育現場視察を通して、パンデミックの経験が照らし出した日本の保育の特徴と課題について若干の覚書を記しておきたい。

2　パンデミック 1 年目の終わりに

筆者を含む数名のチームで 2021 年 3 月（パンデミック 1 年目が終わろうとする年度末）に実施し、回答協力を得た全国 29 都道府県の約 200 名の保育者の声からは、パンデミックがもたらした困難を知ることができる（及川・中島・岩谷・井内・吉川・川田, 2022）。たとえば、送迎時に保護者が玄関までしか入れないという対応が行われた園では、それが大人同士の交流機会を失わせ共通理解を困難にしたという。特に意図しない、当たり前の行為や光景が突然途絶えることにより、自明だった事柄が果たしていた役割に気づかされる。パンデミックは、保育現場にとっての多くの自明性を浮き彫りにしたといえる。

中でも、日本の保育実践の特徴ともいえる「行事」が中止されたり、開催方法の変更を迫られたりしたことをめぐって、上の調査では多くの声があった。筆者は、パンデミックの 1 年目の 12 月に『季刊保育問題研究』誌に「“COVID-X”への想像力:マスク・行事・子どもの感情」という論文を書いた（川田, 2020）。その中で、パンデミックという未曾有の体験は、日本の保育において「行事」が果たしている役割や課題を浮き彫りにしたのではないかと指摘した。行事は、日本の保育現場の年間計画において、好むと好まざるとを問わず大きな位置を占めている。以前から、各地の現場で運動会や生活発表会といった恒例行事の「見直し」（取りやめや趣旨・名称変更など）が検討されるといったある種の静かな“ムーブメント”が進行していた可能性もあるが（江本, 2023）、COVID-19 がその動きにさらにインパクトを与えたことは想像に難くない。それは以下のような現場からの声にみることができる（及川他, 2022）。

「今年度、行事の見直しをたくさん行いました。感染症対策を行いながら、どのように実施できるか。多くの園でも実践されたと思いますが、運動会や発表会は学年ごとの実施。行事を通して何をねらうのかを再度話し合い、大切にしたいことは何か、短い時間の中でどんなプログラムにするのかなどを考えました。発表会では、歌は歌えないけど、CD に合わせて合奏をする。卒園式でも歌は歌えないけど、CD に合わせて手話をする、などの案がでました。全園児が集まる行事は難しかったですが、2 月末には、テラスや園庭を使って、広い場所で全園児が集まり、年長児とのお別れ会を行いました。行事の見直しは毎年行っていたつもりでしたが、今年度は制限があるからこそ、大切にしたいことがはっきりと見えてきたことは成果であったと思います」（国立大学附属幼稚園勤務、経験 20 年、女性）

パンデミックを契機とした行事の「見直し」は、行事そのものの進め方や意味（保育・教育上の価値づけ）の再考を求めたと同時に、行事がない（できない）ことによって現れた保育者や子どもの様子に注目した回答も多く見られた（及川他, 2022）。

「大きな行事(保護者が参加するもの)が中止や縮小になった。運動会などは『保護者に見せる』という保育士の気負いがなかったので、子どもたちが伸び伸びと楽しそうに取り組んでいた。今後の取り組み方を考える機会になった」（私立認可保育所勤務、経験 39 年、女性）

「1 年目であったため、行事が中止された分、丁寧に先輩方が業務等を教えてくれました。コロナで大変でしたが、1 年目としては良い意味で特別な 1 年だったと思います」（私立認可保育所、経験 1 年、女性）

「コロナ感染防止対策のため、園行事等の活動が制限されたことが一番の変化です。そのため、従来の園活動を期待している保護者は園活動への不満足度が高まっています。一方、保育・教育の内容については、行事等の開催が大幅に少なくなったため、子どもも保育者も時間に追われることもなく、以前より充実した日々の保育環境となっています」（私立認定こども園、経験 10 年、管理職、男性）

このように、行事がなくなったり縮小したりしたこと、特に「保護者に見せる」という側面がなくなったことによって、保育者や子どもの日々の保育や姿が大きく変わったという回答が、異なる現場かつ異なるキャリアや立場から記述されたことは興味深い事実である。これは、日本の保育が行事如何によって変容しうることを示唆しているように思われる。

3　イタリアの保育関係者が使う語彙

2023 年 2 月、塩崎美穂氏を代表とする科研チーム [3] と同伴者（保育者や大学院生）の総勢 12 名は、トスカーナ州フィレンツェ市を拠点とする 2 週間の視察調査に臨んだ。視察訪問した主な保育・教育現場は、以下の通りである。

○フィレンツェ市（トスカーナ州）
- Scuola dell'infanzia Serristori（幼児学校、3〜6 歳）
- Scuola-Citta Pestalozzi（小中学校、1 年生〜8 年生）
- Il Centro Zerosei Trifoglio（乳児保育園と幼児学校の統合施設、0〜6 歳）

○ピストイア市（トスカーナ州）
- Area Bambini（学校外の教育施設、主な対象は 4 歳〜 8 歳）
  - -Blu（表現、アート）
  - -Verde（自然、科学）
  - -Rossa（子育て支援）
- Il nido Lago Mago（乳児保育園、0〜2 歳）
- Scuola dell'infanzia Parco Drago（幼児学校、3 歳〜6 歳）

○グアスタッラ市（エミリア・ロマーニャ州）
- Il nido Iride（乳児保育園、0〜2 歳）

これらの保育・教育現場のほか、フィレンツェ市の公教育部門の教育コーディネーター（幼児教育担当）やフィレンツェ市内で長く幼児学校や小学校の教員をされていた方々へのインタビューを行うとともに、Istituto degli Innocenti（15 世紀設立イノチェンティ捨て子養育院を母体とした複合機関）や Centro Internazionale Loris Maraguzzi（レッジョ・エミリア市の乳幼児教育を紹介する総合施設）を訪問した。

視察において、教師/教育士 [4] や行政担当者、研究者らはイタリアの乳幼児教育（正確にはトスカーナ州やエミリア・ロマーニャ州の）についていくつかの共通した語彙を使うことに気づいた。筆者にとって特に印象に残ったものは以下の 5 つであった。

- estetico（美的）
- relazione（関係性）
- autonomia（自律性）
- identità（アイデンティティ）
- continuità（継続性）

estetico と relazione

estetico は、今回の視察訪問で最も印象深く、そして、最も言葉と実践のつながりが明確なものであった。ピストイア市の乳幼児教育について長年研究を行ってきた星三和子は、「ピストイアの幼児学校と保育園に一歩入って目を惹かれるのは、その美的なセンスです。壁の色、置いてある物、飾ってある子どもの作品、さすがルネッサンス伝統のトスカーナ地方だと感心します。しかしそれは、伝統だけではなく、市の教育を担ってきた人たちの美に対する強い思いから発しているのです」（星,

2023, p65）と評している。物の色や形状（陰影）が美しく現れる採光も、窓のレイアウトだけでなく、照明への配慮など保育プロセスへの意識の現われと考えられた。白色蛍光灯を天井から煌々と照らすような園は無く、基本的に自然光を活用し、照明も間接照明や暖色系のライトであった。

ピストイア市の教育センターである Servizio Educazione e Istruzione の Federica Taddei 氏（幼児教育部門の責任者）は、「空間は第 3 の教師です。重要なことは、子どもがそこ（乳幼児教育施設）で気持ちよく過ごせることで、一人になれる空間をつくることも大切なのです」と語った。訪問した施設の保育者たちからも、estetico という言葉は頻繁に発せられ、「人は美しい環境にいると心が穏やかになり、自然に近くにいる人と仲良くなれるもの」というテーゼとも取れる説明を受けた。ここに、estetico と relazione の関係がみえる。

Istituto degli Innocenti の Aldo Fortinati 氏（Direttore di Area Educativa Socíate e Culturale；社会文化的教育部・部長）は、トスカーナ州の乳幼児教育（トスカーナ・アプローチ）における Theory（理論）は 3 つあると述べた。Theory1 は、「空間を重視すること」であり、肝心なのは（教師/教育士が）頭の中にアイディアを持つことではなく、行き届いた空間を提供することにより、子どもたちが自ら何かをはじめることを促すことである。Theory2 は、「大人が変わること」であり、教師/教育士はなるべくしゃべらないようにすることが大切だという。しゃべっていては、子どもの声を聴くことができない。聴こうと思わなければ、見ようと思わない。Theory3 は、「記録と評価を変えていくこと」であり、「できる/できない」の尺度ではなく、プロセスを重視して、その子に起こる変化を見て、記録していくことが重要である。Fortinati 氏は、「こうした方法は、乳幼児教育は間接的な方法を採用すべきだということを意味している」とまとめた。

autonomia と identità

この 2 つの言葉は、いずれも「自己」に関わるものであるが、ニュアンスが異なっている。autonomia は自律性を意味し、更に敷衍すれば、「個人の尊厳」を意味すると言ってよいだろう。ただし、「個人」を尊重することが他者との関わりを軽視することにつながるわけではない。むしろ、個人や自己というものが、根源的に他者と共にあることを前提としている。

ピストイア市の乳児保育園 Lago Mago の教育士は、園の概略を述べた後「子どもたちの自立は促すのですが、一番重要なことは人と関係を作れるようになることです。それはとても時間のかかることで、そのために時間のゆとりがあることが大切です」と述べた。

Lago Mago は、湖のほとりに建つ質素でも美しい建物で、白い壁にオレンジの鉄製の窓枠が目を惹く。建築家である卒園児の保護者の設計で 1980 年代に建てられたという。生後 3 か月から満 3 歳まで 65 人の園児に対して、教育士 9 人と補助職員 3 人ということで、子ども数に対して大人が多いわけではない。イタリアの職員配置基準は州や基礎自治体（comune）によって異なるが、教育士 1 人あたりの子ども数上限は 0 歳児は 5〜6 人、1 歳児は 6〜7 人、2 歳児は 7〜10 人と、むしろ日本の配置基準より多いのである（星, 2021）。にもかかわらず、園の中はとても静かで落ち着いていた。訪問したのが午後遅めだったこともあり、すでに降園した子どももいたので全員そろっている場合の様子は分からない。

しかし、1 人でそれほど沢山の子どもを見なければならないとしたら、1-2 歳児での「かみつき」や「ひっかき」の問題はないかと案内役の教育士に訪ねてみると、質問の意図が良く分からないというような表情をして、「それはありませんよ」と答えた。園舎内を見学しながら、空間の絶対量が豊かであることと、やはり estetico な環境・空間であることが大きな背景であろうと想像した。「空間は第 3 の教師」というテーゼが、現実の空間や環境構成に一致している。写真 1〜4 は、Lago Mago の 2 歳児の保育環境の一部である。

写真1

写真2

写真3

写真4

フィレンツェ市の乳幼児教育コーディネーターの Lucia 氏（姓を未確認）は、「オムツ交換というのは、とても親密な子どもと教育士の関わりの時間で、子どもはトイレの中で自主性を身に着けていきます」と述べた。イタリアの 0 歳児室におけるオムツ交換台には、しばしば階段がついている（写真 5）。大人が登るには小さすぎるこの階段は、乳児用である。オムツ交換においても、大人は子どもに先回りせず、子どもが自ら換えることを求め、階段を登ったら大人がそれに応えるというプロセスが想定されているようである。しかし、それは 1 から 10 まで子ども任せということではなく、オムツ交換ひとつとっても子どもと大人とのやりとり（対話）を通して進めていこうという意志が、小さな階段として環境に明示化されているということであろう。そこに、子どもの autonomia への視点も表われている。

一方、identità の方は、「自分を知る」というモメントである。フィレンツェの旧市街地にある Serristori 幼児学校を訪問した際、5 歳児の空間に写真 6 のような子どもたちの作品が飾ってあった。等身大にも見える子どもたちの裸の全身の絵である。この絵について教師に尋ねると、「これも自分を知るということの一環です」とのことであった。自分の身体について良く知るということだろうか。フィレンツェでは、子どもたちが「アイデンティティ・カード」と呼ばれる、自分の顔を絵で描いたり、自分の身長をペン何本分かというかたちで表現したものを作成し、きちんとした服装をして 5 月にベッキオ宮殿（市庁舎）の市長の元に行き、サインをしてもらうという儀式があるとのことであった。

いま一つ、イタリアの乳幼児教育施設で必ず目に入るのが「鏡」である。日本の園でも鏡はあるが、基本的には機能的な理由で設置されているだろう。洗面台や身だしなみに使う場所に鏡がある。しかし、訪問したイタリアの各園では、必ずしも機能的理由で設置されているとは思えない場所にも鏡がある。しかもその数が多い。

写真 5

写真 6

写真 7

写真 8

写真 9

写真 7 は乳児のゾーンの天井から吊り下げられた鏡である。これは、乳児が仰向けに寝ている状態で自分を映し出してみることを促している。写真 8 は、山型に組まれた板の内側に鏡が張り巡らされた環境で、中に入ると合わせ鏡の効果で自己鏡映像が様々な角度から無限に見える。写真 9 は、トイレの便器の横の壁にある鏡で、機能的な意味では必要のない所に設置されている。むしろ、用を済ませて立ち上がったところで鏡の中の「自分」に出会ってしまい、いつまでも子どもが戻ってこないという事態も想像される。

鏡という環境も、「自分を知る」ことを促す実践の一部であろう。ナルキッソスの神話や古代ギリシャ賢人の「汝自身を知れ」という格言のように、西洋文化にとって自己像への執着は古来のエートスを感じさせる。西洋近代においては、精神分析学派ジャック・ラカンの鏡像段階論、それとも関連の深いアンリ・ワロンの発達理論やモーリス・メルロ=ポンティの児童心理学講義においても、「鏡」は赤ん坊が人間になっていくにあたって重要な環境でありモチーフであった。発達心理学でなじみ深い rouge test（mark test）は、鏡を見た子どもが、顔に付いた口紅（マーク）にいつ頃から気づくのかを調べるための実験手続きである。

Istituto degli Innocenti の Fortinati 氏は、「identità は重要だが、まだそれがどのような意味を持つものなのか、手探りの状況です」と述べていたが、identità つまり「自分を知る」こと（自己理解）を乳幼児教育の重要な柱にしているのは確かである。子どもの自己理解に教育の目的を置く

立場に対して、日本ではむしろ保育者の専門性を「子ども理解」に置いている（川田, 2021）。もちろん、イタリアの幼児教育者にとっても、子どもを理解するプロセスは不可欠だろう。ただ、その目的が子ども自身の自己理解につなげていくことにある点が興味深い。日本の保育者の専門性であるとされる「子ども理解」は、果たしてその先に子どもの何を育てようとしているのだろうか。

写真 10

写真 11

continuità

筆者の印象に残った 5 つの語彙の中で、continuità は最も抽象度の高いもののように思われた。estetico と relazione は、まさに五感を通して感じ取ることのできる実在性があった。autonomia と identità は、やや抽象的になるが、オムツ交換台の階段や鏡、等身大の裸の描画などを通して、伝えようとしていることが何であるかを概ね理解することができた。

それに対して、continuità は哲学的な含意を豊

かに擁していると感じられた。ピストイア市の Area Bambini Blu の教師である Monica 氏（姓を未確認）は、Area Bambini の活動を次のように説明した。なお、発言に出てくるステンドグラスが写真 10 である。

「ここは、何か特別なことをするのではなく、園や学校での活動とのつながりを大切にします。園や学校での経験とここでの経験に一貫性があること、続いていくことが重要です。あそこの天井に近いところにステンドグラスがあるでしょう？ あれはピストイア出身のアーティストが作ってくれたもので、『昼と夜』という作品です。子どもたちの一日の流れを表していて、時の円環性、つまりまた明日が来るということ、そこに希望があるというイメージを表現しています」

イタリア視察中に教師/教育士たちの口から最も頻繁に聴いた言葉が、estetico と continuità であったように思われるのだが、continuità は実に様々な文脈で使われていた。Istituto degli Innocenti には、乳児保育園が 3 か所、0〜6 歳の統合施設が 1 か所あるとのことだったが、そこで働く教師/教育士たちが園庭を案内しながら次のような説明をした（草のトンネルが写真 11）。

「あそこに草のトンネルがありますよね。トンネルの向こうに建物から外までが突き抜けてつながっています。それが継続性（continuità）です」

様々な場面で使われる continuità には、活動の場所（家庭と園、Area Bambini と園・学校など）を超えた子どもの経験のつながりというだけでなく、建築における空間設計やドキュメンテーションの歴史性、家族や地域の歴史をも含んでいると考えられた。この「つながり」という部分の重要性については、日本の保育者も首肯する者が多いと想像されるが、果たして根本的な面で共通しているかどうか議論を重ねる必要があろう。ここでは、日本の「行事」保育文化と関連づけて考察してみたい。

4　継続性と循環性

世界的に核廃棄物処理が問題になる中、1983 年にフィンランドは高レベル放射性廃棄物の最終処分場の建設方針を立て、2004 年から地層処分施設「オンカロ」（onkalo；フィンランド語で「洞窟」「空洞」の意）の建設を開始、2024 年 8 月末に試運転を開始するという。オンカロが話題になる理由の一つは、核廃棄物の保管期間を 10 万年としているところにある。10 万年といえば、1000 世紀に相当し、ホモ・サピエンスが地球上に現れた時代から現在までの時間に等しい。この途方もない未来に向けて、意図的・計画的に施設を稼働し続けることができるという信念はどこから来るのか。西洋近代の時間観念は直線的で不可逆性があり、それは発達観・発達理論とも無縁ではないとの指摘もある（やまだ, 2011）。

ここでオンカロとイタリアの乳幼児教育を重ねて議論するのは早計で乱暴なことであろう。しかし、日本の保育者や保育研究者が自分たちの実践哲学を外国人に説明するために、果たして continuità に比類する観念を持ちだすだろうか。「養護と教育の一体性」を語ることはあるかもしれないが、そこに時間の観念も空間の観念も含まれているわけではない。

もし、日本の保育の実践哲学における時間観念を考えるとすれば、それは継続性というよりも、「循環性」の方にあるかもしれない。COVID-19 パンデミックの 1 年目を振りかえった保育者の多くが、「行事」について話題にしたことは先に触れた。そこには、必ずしもネガティブな理由だけでなく、行事の中止や開催方法の変更による発見的要素も多くあったが、いずれにしても、日常の保育において行事がもつ意味の大きさがあらためて浮き彫りにされたといえる。

フィレンツェで長く幼児学校の教師をしてきた Maria 氏（姓は未確認）と Sandra 氏（姓は未確認）に、幼児学校での行事について尋ねると、それほどあるわけではないが、宗教にちなんだもの（クリスマス等）と、「一番準備が大変なのは、学年末

のパーティーね」との回答であった。視察が 2 月であったため、ベネチアのカーニバルの時期と重なっていたこともあり、訪問した幼児学校では仮面づくりの様子も共通して見られた。

こうした年中行事が園の実践に取り入れられる点は日本とも共通しているが、おそらくイタリアに比べて日本の保育現場で実施される年中行事の量は相当に多いものと想像される。入園式にはじまり、修了式・卒園式に至るまで、何らかの行事のない月はなく、時には毎週のように、何らかの行事的なもの、つまり、子どもたちが自ら行うの日々の遊びの展開と必ずしも関係なく、毎年この時期に行うと予め計画されている活動がある。そこでの時間観念は、子どもの視点から順行的に構成されていくものではなく、先に決められたところに向けて子どもを誘導していくという、逆行的構成（浜田, 2021）の側面が濃厚にある。これはおそらく、近代化の過程で development が「発達」というように「達」の字を入れて翻訳されたこととも無関係ではないだろう（川田,　2019）。

一方で、年中行事は季節の変化・節目に行われるものが多く、人工的に立てた計画にすべて従っているわけではない。その意味では、保育における様々な行事は子どもが知覚する環境変化と無関係とも言えず、単純に「誘導」と表現するのも適切ではないといえる。教育的意図と子どもの実態と自然サイクルという三項で捉えなければならないのが、「保育における行事」というものであろう。

Innocenti の Fortinati 氏は、トスカーナ・アプローチにおける Theory の 3 つ目として、「記録と評価を変えていくこと」をあげた。子どもを「できる/できない」の尺度で評価するのではなくはなく、その子に起こる変化を見て、プロセスを記録していくことを強調するものであった。日本の保育者の多くも、その指摘に首肯できると思われるが、実際にプロセスの記録をつけようとすれば、そこには子ども自身の活動の継続性を十分に保障し、それをじっくりと見て、記録に落とし込んでいくゆとりが必要になる。これは、乳児保育園 Lago Mago の教育士が、子どもたちの自立を促すというのは確かにあるが、一番重要なことは人と関係を作れるようになることで、それはとても時間のかかることだからゆとりこそが重要だと述べたこととも重なる。

日本の保育における行事は、それ自体が「基底的カリキュラム」となって、実践全体を方向づけているように思われる。ゆえに、パンデミック 1 年目を振り返る保育者（経験 1 年目から管理職まで広範に）が語らずにはおかなかったのだろう。そのことを認めたうえで、もし行事のために子どもの活動や経験の継続性が途切れてしまったり、行事の準備で忙しく保育者のゆとりが失われてしまうならば、「プロセスを重視する」という意味での継続性よりも、「毎年同じことをする」という（あまり良い意味ではない）循環性の方が優位になってしまうかもしれない。

保育カリキュラムというものには体系性があり、各要素に還元できない全体としての意味や機能を捉える必要がある。筆者には、日本では良きにつけ悪しきにつけ「行事」とどう向き合うかを飛び越して、カリキュラムの議論をすることはできないように思われる。イタリアへの視察調査は、あらためてそのことに気づかせてくれるものであった。

注

1) Area Bambini は、ピストイア市の教育を象徴する施設であり（星, 2023）、Blu が「アート（表現）」、Verde（緑）が「自然と科学」、Gialla（黄）が「物語と演劇」、Rossa（赤）が「子育て支援」をその専門領域としている。
2) 本稿において、イタリア人のインフォーマントの発言和訳部分は、通訳者による翻訳を筆者がメモした内容に基づく。
3) メンバーは、塩崎美穂（代表・東洋英和女学院大学）、赤木和重（神戸大学）、大宮勇雄（福島大学名誉教授）、岡花祈一郎（琉球大学）、加藤繁美（山梨大学名誉教授）、川田 学（北海道大学）、吉川和幸（国立特別支援教育総合研究所）。なお、メンバーの内イタリア調査に参加したのは塩崎、赤木、岡花、加藤、川田、吉川の 6

名。

4) 日本では就学前施設である保育所、幼稚園、認定こども園等での実践を総称して「保育」、幼稚園教諭と保育士をあわせて「保育者」と呼ぶことが多い。イタリアでは、特に 3 歳から 6 歳が通う幼児学校（scuola dell'infanzia）では「教育」(educatione) と「教師」(insegnante) と表記した方が適切であり、2015 年から推進されている 0 歳から 6 歳までの統合制度でも、教育省が指揮をとっていることから、イタリアについて記述する文脈では原則として「乳幼児教育」「教育」「教師」（乳児保育園 il nido では教育士 educatore）と表記する。

文献

江本周華（2023）保育園が行事を見直すとき：そのきっかけ，背景及び保育者の認識変容をめぐって．北海道大学教育学部令和 5 年度卒業論文（未公刊）．

浜田寿美男（2021）心理学をめぐる私の時代史．ミネルヴァ書房

星三和子（2021）イタリアの乳幼児教育の動向：0 歳から 6 歳の統合制度をめぐって．保育学研究, 59, 259-270.

星三和子（2023）イタリア・ピストイアの乳幼児教育：子どもからはじまるホリスティックな育ちと学び．明石書店

川田　学（2019）保育的発達論のはじまり：個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ．ひとなる書房

川田　学 (2020) “COVID-X”への想像力：マスク・行事・子どもの感情. 季刊保育問題研究, 306, 18-29.

川田　学（2021）総論 問題としての子ども理解．発達，168，2-8.

及川智博・中島寿宏・岩谷　樹・井内　聖・吉川和幸・川田　学（2022）保育者たちがふり返る“COVID-19 パンデミック”の 1 年目．北海道大学大学院教育学研究院紀要, 140, 117-154.

やまだようこ（2011）「発達」と「発達段階」を問う：生涯発達とナラティヴ論の視点から．発達心理学研究, 22, 418-427.

付記

本稿は、KAKENHI No.23K2069513 の助成を受けた。